

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

工房訪問⑤ 水牛編集委員会 2

——『水牛通信』はどのようにつくられるか

映画時評 鎌田慧 24

日本脱出記 志沢小夜子 12

演劇時評 津野海太郎 26

ソウルの夜 鎌田慧 16

音楽時評 高橋悠治 28

キリコのコリクツ 玖保キリコ 19

水牛かたより情報 30

料理がすべて 田川律 22

VOL.7 NO.11

毎月1回・10日発行

定価200円

工房訪問⑤ 水牛編集委員会

『水牛通信』は どのようなに つくられるか

水牛編集委員会が水牛通信を作っている。だれが編集委員か、ということとは、それほどはっきりしていない。何人かが自分が編集委員だともいっていない。そうおもってなくても編集会議にきている人たちもいる。しばらく編集会議をしないで、作っていた時期もあった。材料のあるところ、かっぴにまとめてだしてしまってもできる雑誌だから。

最近では毎月会議をすることにした。中目黒のタイ・レストラン。吉祥寺のスーちゃんの店（ここでは、座談「トラたちの八・一五」を録音した）平野さんの家で水牛楽団が音楽を担当した「カブトムシ」のビデオを見ながらの時は盛会だった。どの回も飲んだり食べたり、おしゃべりの方が主で、次の号の内容はその合間にいつの間にか決まっている。でも決めた本人さえ覚えていないこともあ

るので、その翌日には電話で確認しなければならぬ。

今回は渋谷のコーヒー店に集合してジョン・ヒューストン監督の「女と男の名譽」を見てから、二子玉川のつばめグリルで会議というプログラムで、参加したのは鎌田慧、津野海太郎、田川律、志沢小夜子、平野甲賀、柳生弦一郎、柳生まち子、八巻美恵、高橋悠治。

現代の愛の不毛について実のないおしゃべりがつづくうちに、鎌田慧と津野海太郎はウォッカ・オン・ザ・ロックをどんどん飲んで論争気分になってしまった。

八巻美恵がワープロで打ってきた水牛通信総目次から話がはじまる。

津野「ただね、やっぱりこれは異常だよ。というか、魅力的だよ」

鎌田「目次見るとけっこうおもしろか

ったんだね。一号一号はあまり印象がないわけ。でも、ああして見るとけっこういろんなのがはいつてるね」

津野「もう7年だからさ。それはやはり美恵と悠治の、あそこの発送係の力量だよ」

鎌田「愛が成立してるから——」

八巻「愛じゃないわよ、ぜんぜん。たにかいよ。闘争よ。何よ」

津野「ふつうの意味で、ここでつぶれるからね、たとえば発送なんて、そういうところで」

鎌田「一番はじめに水牛通信に出会ったのはさ、ホラきいてきて、大阪の田中機械の集会にいったらさ、水牛楽団のボーカルがいっしょうけんめい新聞を売ってて、ぼくは、こっちの方がいいよって、もっと売りやすい場所を教えてやったことがあった。新聞の頃だよ。あれは津野海太郎の発想だろ。あんな新聞売れるわけないよ、絶対」

津野「まあいい。だけど、あの新聞はやっぱりすごいすてきなものだよ」

鎌田「ウッソだよ、ぜんぜん大衆感覚も何もないもん。それで雑誌にしたから、いま安定してるわけでしょう」

津野「大衆感覚で成立してるわけじゃないぜ、別に」

鎌田「あんなタブロイド版の新聞なんかね、買う奴いないの」

津野「いいよ。買ってほしいなんて思ってるわけじゃないんだ。かっこいいもの作りたいから作ってるんだから。しょうがないよ、その点は」

鎌田「一人でも読んで、世界が変わるとか」

津野「何だろう、なんでこんなに長く続く——長く続いたって実感ないでしょ——そんなに6年も7年もっていわれたって」

鎌田「ちょっと待って。おれは水牛通信には何の関係もないんだからね」

津野「はじめはね」

鎌田「はじめも最後まで、水牛通信には何の義理もないよ」

津野「義理とかっていうけど、おまえ編集委員じゃないか」

鎌田「おれの考えではじめたんじゃないもん」

志沢「愛よ、愛」

鎌田「きみたちがかわいそうだから、おれ、何かできることがあれば、してやろうと思ってる」

津野「何にもやってくれないじゃないか」

鎌田「知り合った女のこにはみんな、買えっていつてるもん。男は買ったってしょうがないからね。世界を変えるのは女だと思ってるから、男には期待してない」

柳生「やめていく人もいるもんね」

八巻「読む方はつかれてくるんじゃない、やっぱり」

柳生「おかねだすのは別にいやがってるわけじゃないんだよね。ただ、郵便局で送ったりするのが、めんどくさいのね」

平野「あれね、本屋でけっこう売れると思うんだ」

鎌田「なんで買うんだろうね」

津野「水牛新聞の頃は責任感があったよ、一種の。あそこの家、悠治の、今の家じゃない、あそこの家と呼ばれて、よくと堀田正彦と悠治とPARCの武藤一羊。よくはアジアの演劇っていうものについて知りたいと思ってる。悠治たちは音楽やってたから。それでアジアのそういうものの情報をやるメディアをつくろうということ」

鎌田「『世界から』の前身なのか」

平野「アジア文化情報紙っていつてたな」

津野「そう。アジア文化隔月報。要するにある種の運動体の形態からはじめ

要するにおおげさなことこのばかば

かしくなってるっていうんで、どんだんどんどんそうやって日常的なレベルのほうが必要なんじゃないかっていうふうに変わってくるわけさ。その過程の中にあなたが入ってきたわけじゃない。だからあなたは日常派の代表なわけよ」

鎌田「バカをこえたバカなわけか」

津野「そうするとき、使命感とかさ」

鎌田「使命感はあるよ、よくは。赤字になったっていいんだもんな。なったらつぶせばいいんだから」

津野「たとえ運動ってのは肩肘はらなくちゃいけないのかっていうことだつて、そこで支えてる人間のレベルはかならずしもそうじゃないから、そうじゃないレベルのほうを強調していうというふうになるんじゃないの」

鎌田「おれ自身いろんな集会にいくからね、持っていけば、十部ぐらいく

売れるよね。めんどくさいから売らないだけなのよね。だから、もし、明日つぶれるっていったら、売るかもしれない」

八巻「それじゃあ間にあわない、十部ぐらい売ってもらっても。二千円じゃない、たった」

鎌田「つぶれないんだったら……」

八巻「つぶれないわよ、まだ」

鎌田「ねえ、なにもおれがいっしょうけんめい売らなくたって」

津野「ただ、悠治とかおれとかきみとか平野とかっていうと、二十代三十代はかなり肩肘張って生きてきたじゃない、前衛っぽく。そうすると、ちょっとね、肩の力の抜きたの練習をしたわけよ、この場所だね。だけど、この人たちははじめから肩の力がぬけてるからさ、その練習を見てばかにしてるわけよ、よくの感じではね」

鎌田「きみら、38年生まれにもっと尊

たわけ。ひっちゃかめっちゃかよ。そしたらこれはナンセンスだ。まず活版で新聞活字じゃなくて写植で軽オフでいいと。人間関係も、運動体で若いやつに「まだやってないのか、おまえはやく行け」っていうふうなのを無くすためにはさ、自分がやればいいわけだよ。手段も組織のかたちも簡素化されてくると、これだけのチームになつてしまわうわけ。そのつぎに、たとえば、カラワンね、解放区の中から悠治のところにテープがくるとかっていうと「すごいじゃん！カラワン」っていうふうになるじゃない。それで具体的なコンタクトができはじめるとき、ただのバカだったっていうことになるのか、あははははは。PETAだってそうだよ。「PETA、すごい！」って思ってるコンタクト取りはじめて、一年か二年か三年つきあうと、おたがいただのバカ同士になっちゃうわけよ。

敬の念をもたなくちゃダメじゃない」

八巻「もってるわよ」

鎌田「偉大な世代なんだ、ばくら」

高橋「お？」

鎌田「しょうがないの、あんまり近くにいないからね。近くにいると偉さってわかんないじゃない。親子の感じもそうでしょ。遠くはなれたときにさ、死んだ時とかさ」

津野「あいつは偉かったと。おまえはそこに賭けてるな」

鎌田「ああ」

高橋「きのうヨーガ教室やったじゃない。そしたら先生がジッと見ていてさ、悠治さんは左のほうに傾いてる」

鎌田「左の肩が上がってるの？」

高橋「いや、下がってるの。だから全体が左にかたむいてるわけ。何年前かに、花崎昇平がつるまきさちこさんにあなたは左のほうがかたくなってるって言われたのね、左翼だからっていつ

て。なるほど、とかいってあの人はいっしょうけんめいかよったんだよね。それで最後はけんか別れするんだだけさ」

津野「ただね、ひとりじゃ力は抜けないよ、ぼくの感じではね。要するに、人間関係を全部変えない限りはだめなんだよ。たとえばね、ウイリアム・モリスが十九世紀の世紀末の人たちといろんな交流をもつてしょ。そこからあと、社会主義に移るじゃないか。そのときさ、モリスの人間関係が全部かわっちゃうわけ。人ってのはひとりじゃかわれないんだよ、いくらどういふうにかわろうと思っても。おれがかわらうと思うと、おれの人間関係がかわらないとだめなの。そう思うけど」

鎌田「人間関係なんてそんな簡単にできるものじゃないよ」

津野「だから、たとえば水牛がひとつのかたちとして成立したのは、人間関係をつくりかえるということも少しはあったんじゃないのかなあ、そこに。水牛だけじゃないよ、水牛をベースにした仕方……、おれの場合はそうだよ。だってきみとはじめて会ったんだって水牛の」

鎌田「そうだよ。高橋悠治がびっくりして、へえ、新日文でへんな団体だねって言ったんだよ、ね。おれと津野海太郎と三人で会って」

高橋「東京駅のアート・コーヒー」

鎌田「それ重要なことかなあ」

津野「集まったやつが消えていくのはなんでかなって考えたほうがいいよ」

津野「だとして、あいつらがともかく来て、達成できなくて、人間関係からはじきとばされてしまったと。いろいろ

津野「いっばいいいたよ。そういう若いやつとどこでやろうというのが基本的におれたちの姿勢じゃないか、最初の段階では。で、そいつらがせんぜんだめで消えてしまふからさ、結局おれたちがやってしまったっていう」

鎌田「なんで消えたかっていうのは、やっぱり考える必要あるとおれは思うよ。なにかしようと思っただけで来たんでしょ？ どうなの？ ね、それは。なにかしたかったわけでしょ」

津野「したかったんだら、もちろん」

鎌田「むこうの論理とこっちとちがうんだから」

津野「それが重要なことかなあ」

鎌田「集まったやつが消えていくのはなんでかなって考えたほうがいいよ」

津野「だとして、あいつらがともかく来て、達成できなくて、人間関係からはじきとばされてしまったと。いろいろ

ちがどうするのかっていう問題あるよな。おれたちがやればできちゃうことを、なんで若いやつをだきこまなくちゃいけないのかっていうことだよ。できないから若いやつをかりたいと必死で。おれたちの力ではできないことをやってんだから、若いやつをかりたいってふうにはなってるんだよ。水牛通信ぐらいいいよ、おれたちでできちゃうんだよ。事実できてしまったわけだから。そうすると、若いやつをまきこむっていうことは理由がなくなっちゃうじゃない」

鎌田「いや、おれがいいたいのはね、やりたいと思ってくるわけじゃない、善意で。それがどうして消えてしまふのかなあ。水牛を批判してるわけじゃない、わかんないわけよ、おれは。つまり、やりたい情念があつて来たやつがなんで去ってしまうのか」

津野「情念ほどのものがないんだよ」

鎌田「そんなこといったらさ、みんな切ってしまうことになるぞ、あいつら情念がないって言ってしまったら。あつたんだよ絶対。絶対あつたんだよ。それは高橋悠治の有名性についてきたやつもあるかもしれないよ」

津野「それはね、たぶんすくないよ」

高橋「そういうのは、あんまりいらないよ」

鎌田「なんかかしたいと思っただけでする場がなかったのかもしいんだよ」

津野「うそうそ、それはね、プロセスのなかではいくらでもあったの。たとえば発行人に堀田くんの名前が残ってるようにさ、それはあるわけ。おまえが中心だぞ、っていうふうにやってる場所はあるわけ。最初の段階はそういう気持があるんじゃない、みんなのなかにたぶんあつたんだよ、次の世代が中心だ、っていうふう置いてく部分

があつて」

鎌田「だから、おれがわかんないのはね、かれらにとつてたいした重労働じゃないのにな」

津野「知らないよ、かれらにとつては、ぼくたちのなかでつきあつてきた若い連中は、ま、何人かいるよ、名前がふうつと思ひつかぶ連中でもさ」

鎌田「やりたい、っていう情熱が、どこかで、やれないっていう現実にかわつたかもしれない」

津野「だけど、そのことがつまらないとか、おもしろいかいということじゃない、あ、それでもってはじめてちがうレベルが見えたなっていうふうに、おれはわりとポジティブに思うな。いいじゃない、べつにそんなこと。若いやつがどうであろうと、今のほうがぼくはおもしろいんだっていうふうに思うけどな」

高橋「あの頃は水牛に限らないんだけ

津野「つまりさ、あるスタイルをおれたちが示すことができればいいんじゃないか。自分自身に対してもそうだよ。たとえばこういうふうにいっしょにやることによつて、悠治なら悠治のスタイルを、それは悠治がおれと違う場所生きてるときの悠治のスタイルってものとはちよつと別に、いっしょに生きてる部分で、あつと思つたときにはおれのスタイルに組み込むことができると、ね、信じられないような人だと。だけど、おれたちは鎌田さんをそういうふうに思わないからさ、こういうふうにしてるあなたのそういうことが、おれならおれの役に立つわけだ」

鎌田「おれなんか最初にあうときみんな、鎌田さんをもつと体がでっかくてりっぱな人だと思つてるんだよ」

津野「おれだつてそうだよ。おれはも

どさ、来ればなんとかなるっていうところがあるわけよ。自分がなんか持つて来るといふんじゃなくてね。これやりたいから、ここでやらしてくれっていうんじゃないわけ。ぼくのようなものでも問題意識だけはあるんですが、どうしていいかわからないから、つて来るわけじゃない？ で、じゃあどこどこ行つてこういう人の話きいてきてください、ってインタビューに送りだしたつてさ、自分からこの人の話ききたいって行くわけじゃないから、なんかだめなわけよ。だめだだめだつて言つと、自分でもだめなような気になつて離れていく、と。だけどそういうの育てるつていうようなことはやっぱり、あんまり実りのあることじゃないと思ふのね、どつちにとつても」

津野「だからね、それが実りない、つていうことを知つたのは、やっぱり悠治のそのことですよ。ぼくはね、実り

つとほつそりした、さ、はははは。津野さん、電話の声と全然ちがいますねつて言われるよ」

平野「おれなんかね、もつとほつそりしてゐるつて」

津野「シャープな人だつて。電話の声でいうと」

鎌田「けつこうシャープだけどねえ。

だから会わないほうがいいんだよ」

津野「きみの程度の差じゃないんだよ。ぼくたちが悩んでるのは」

鎌田「まあいいんだよ、若いやつ入れなくたつてね。つぶれりゃいいんだからさ」

津野「若いやつを入れなくていいつていうやりかたはちよつとびっくりしたよ、自分で。あ、そうか、それでいいの、か、つて思つたときの解放感」

鎌田「きょうの映画だつて、マフィアの後継者、ちゃんとつくつてんだから。おれら、後継者ぜんぜんいないんだか

あるつて思つてる部分もあつたわけだけどね」

鎌田「水牛通信なんていつつぶれたつていいんだけどね、もし若いやつで、なにかやりたくてきたやつがつぶれてしまつたら、それはこつちにも問題がなかつたかつて考えない？」

津野「ぼくは思わない。まったく思わないね。ないしは、もしそうだとしたらそういう若いやつはなにかやるよ。

なにかがつぶれようと自分でやるよ」

高橋「なんかやつてるよ、今は。今のほうが」

鎌田「やつてればいいよ。おれたちとやつてもつまんないから自分たちでやればいいんだよ、それは」

高橋「だから、べつにここにきてやんなくてもいいわけ」

鎌田「そうそう。こつちを否定してきあんばかどつきあえないつていうんで、自分でやればいいんだよ」

ら」

平野「後継者はやっぱりつくつたほうがいいんじゃない？」

津野「いや、後継者はいらねえよ。金にならねえんだもん。財産をどう維持するかつてことになりゃ、そりゃ後継者いるけど。あるの？ わかんないけど、もしかしたら、あるんじゃない？ 美恵のところに」

鎌田「後継者ね、うーん」

平野「精神だよな」

高橋「だけどね、自分で育てる後継者つてだめなんだよ、だいたいだめになつていくわけ、ね。だから、こういうのがあつた、それでさ、何年かやるじゃない、ね。そうするとそれをどつてで編集やつてるやつが見てさ、違うことをやるとか、そういうことはあるわけよ。むかしやつてた雑誌もさ、えーと、三年間やつたかな、「トランソニック」つて雑誌。三年間でもうだ

めだつていうんでやめたわけ。そして、やめてしばらくして朝日出版社の中野さんという人が来てね。今度雑誌をつくりたいから、あれを見て考えてなんか協力してくださいって。「エビステーマー」はあれをみて、取ってる部分があるわけ。だから自分でやらないほうがいいわけよ、そういうことは」

平野「じゃあ、どっかで出てるかな、水牛みたいなのが」

津野「うーん、水牛はむずかしいよ」

鎌田「そういうところに身売りしよう！牛乳協会とかさ」

平野「なに、そんなのあるの？」

津野「水牛はむずかしい。だってそれがやってる仕事のしかたってのはちがうだもん。水牛ってのはさ、ものすごい複雑なメディアよ。いまの感じでいうと。たとえばあの頃の悠治と『トランソニック』との繋がりかたはすごくよくわかるよ。だけど、いまの

水牛はやっぱり不思議だよ」

鎌田「だって次号がどういうふうになるか、全然わかんないんだもんね」

津野「なんにもわかんないんだもんね。だれもそれについて……」

鎌田「こういう雑誌ないよね。次号という雑誌になるかわからない雑誌っていうのは」

高橋「でも、次なにかあるかわかんないからやってる、ってところもあるんだよ」

津野「きみ、なんだよ、そのヘッドホンかけて」

高橋「これは録音されてるわけよ」

津野「やだなあ、おい」

鎌田「これは結局責任者が全然いないからいいんだ。責任者は『堀田』っていう抽象名詞しかね」

津野「いないやつしかいない」

高橋「まあ発送責任者ぐらいいだ。あとは、これやる、っていうことになれ

ば、全般的にまかしてるわけだからさ。こういう記事は困りますとか、こうやってくださいとか、そういうのはないんだから。だから何号か続けば、これじゃつまらないから、こんどこっちゃろう、ってことはあるけどね」

津野「あきた、あきた」

高橋「ちよどよく、あきるんだよ」

津野「最低限のあきる能力はあるんだよ」

高橋「だいたいね、予定より先にあきてるね。一年これでやろうって場合は半年しか続いてないよ。だから雑誌は続いでるんだよ」

津野「おれたちがこういうふうにしちゃべつてるときに美恵がしらんぷりしてるだろ、これがずるいんだよ。こら、美恵！ おまえが責任があるのにさ、いっさい責任ないみたい顔して」

鎌田「発送責任者」

八巻「発送の責任とってるじゃない、

ちゃんと」

津野「わたしたちがエネルギーをかけて考えてることを、きみはさらさらとそういうふうに使っててくれて、うれしいなあと言ってるわけよ。くやしいなあ。鎌田さんね、水牛通信というバカメディアもだんだん有名になってきたんですよ、これだけ続けると」

鎌田「まずいね。あんまり知られないほうがいいんだよ」

津野「みんなだれも、知られないと思ってる続けてたらね、だんだん知られてきたんですよ」

鎌田「買った連中だけが知ってるって、いうのがいいんだよ、秘密結社の通信て感じのほうがいい。あんまり知られないほうがいいんだよね。だって、メリックトせんせんないんだから。一定程度売って回収すれば、それでいいわけだよ。ね」

高橋「うふふふ、なにも言わないけど

テープだけは回ってるな。もうすぐおわりだ」

まち子「あ、じゃあどうするの」

鎌田「もったいないなあ、ねえ」

八巻「どうしたの？ 鎌田さん。そんなところで寝ないで。またすべりおちる気？」

鎌田「だいじょうぶだよ、寝ないよ」

よっぱらいの議論をみんながきいていたわけではない。カセットの近くでこの議論がすすむのと同時に、次は水牛でヨーロッパ旅行をしたい、という話が進行していて、結局それは、来月の会議は松本で、三宅様名と高橋悠治のデュオ・コンサートをきいてから、浅間温泉の旅館にいて飲もう、という話におちついたのだった。

その合間をぬって田川さんの、「ねえ、それで今度の号は何にする」と

いう声が時々きこえてはいたが、四時間たって、さあ、これで全部決まった、と店をでたあと、やはりだれも、何を決めたのか、わかっていなかったのだった。

日本脱出記

志沢小夜子

「どこへいらっしゃるの？」「スペインのイビサ島へまず行って、それから先のことばそこで考えることにしているの」「イビサ島？ それどこにあるの？」と何人かの人の反応。

イビサ島はかのマジョルカ島の南の方、地図で言えばマジョルカの下の小さな島。ヨーロッパ、特にイギリス人とドイツ人の陽浴の地と言えはいいだろうか。かつてはヒッピーの天国と言

われ、ヌーディスト島としても有名だったと聞いた。島の回りはほとんど小さな入江を持つ海水浴場で、近年、夏の間（四月から九月位かな？）は観光客で島は満員とのこと。ほとんどの人がここに別荘を持っているか、長期滞在の人ばかりで、ここに二、三日いるなんて、忙しい日本人位のもの。それもツアーなんかの日程に入っていないから、日本人には一人も会わなかった。つまり、忙しい日本人は私と中井さんということか。

スペインは長い間、私の夢だった。その言葉も含めて、ずいぶん若い頃から、ヨーロッパ嫌いの私にしてはめずらしく、関係する物は興味深く読んできた。

かつてヨーロッパではないと言われていたイベリア半島のアラッぽいこの人々の陽気さは、本の上の印象もさぶるよかった。ピカソもゴヤもミロも

イビサに着いたのは九月七日、夜も十時を過ぎていた。暗い島をとり囲み、迫るように、星が輝いていた。一瞬、日本での自分のありようを思った。

私は長年の疲労が出たのか、職場でクタクタになって、今年、軽い心身症にかかった。ずっと、夜眠れない日が続き、夜中に信頼している友に電話をする。それで気がすむのか、次の日は職場へ出かけ、出張へ出かけ、三月までは自分の持っている責任ある仕事だけは片付けてと思ひ、足がどんなに重くても出かけて行った。

そんな折、身体の調子が悪いので人間ドックへでもと思ひ、申し込んだ矢先、親友から「カウンセリングの方が先よ」と言われ、暗たんたる思ひを抱いて、思いきって知り合いの医者の方へ出かけた。職を一カ月休んで出てみると、身体が完全に職場を拒否していた。安定剤を飲まなければ、恐くて同

僚とも話ができなくなっている自分に驚いた。夫と医者が職場に説明に出かけ、私は一年の休職をもらった。

相変わらず休んだ日からの外へ出られない気持は続き、それが三カ月位、だんだんと声も出るようになり、職場以外の所へはようやく出られるようになったばかりの旅だった。

日本を出たら、案外よくなって帰ってこられそうな気がして、私は長年の夢の実現へ走った。

イビサの星を見ていて、ずいぶん疲れて仕事をやってきたなと自分をいたわってやりたい気持になっていた。

サン・ホセという大きな町を通過してカラバデアという海岸を持つ、高台の家へ着く。

この家の持主はブルガリア人のイッシーさん。彼女は夫と共にこの海岸を開発した人で、子供は二人、共にもう成人して、彼女は離婚をしている。一

そしてガウディも私を呼んでいた。

何といつてもフェリーベ・ゴンザレス——スペインの赤いばらは私の心をかきたてた。ゆるやかな社会主義をめざして暮らす人々の街の中を人々の笑い声とともに一日中でもゆっくりと歩いてみたかった。

夢は現実となって、私はイビサ島にいる。

中井さんは昨年、同居していた戸田徹氏に先立たれ、戸田氏の骨を半年前にインドに流し、そして今、イビサに持ってきている。一卵性夫婦と言われた、人もうらやむ一对の男女の別れをそばで見えてきた私は、一緒に旅をして、そういう相手と暮らした中井さんとうらやましいと思った。それは嫉妬にも似た感情のような気さえした。相手がいて自分があった、その関係の質が、密度が、中井さんの中に今も醗酵しつづけているということである。

人はドイツで映画の仕事、一人は彼女とここにいる。そのフィリップがゆかたを着て迎えて出てくれた。迎えに出たのは人間だけでなく、狼のような犬が二匹、スパニッシュ・ペキニーズが二匹、猫四匹、一匹は重症でふせている。昨日悪い草を食べたためと聞いた。イッシーさんのこの家を紹介してくれたのは志名子嬢。私たちの友人の友人。志名子嬢は若い頃から世界に出て、あちこち歩き、時々日本へ帰ってアルバイトをし、また出かけるという生活をしていたが、この度すてきなドイツ人と暮らすことになった。そのドイツ人ハンスと知り合ったのが、ここイビサ。彼女は、イッシーさんとはずいぶん長いつきあいで、今回もここに遊びに来ている志名子嬢の日程に合わせ、私たちもお金持のフンイキにつかの間ひたれることになったのだ。泊まったのは、ゲストハウス、古い

この島の石の家。ちなみに3LDKでトイレ風呂つきである。パティオ(中庭)にはいちぢくの木が繁り、日本に住んだことがあるイッシーさんは、とうろうまでコンクリートでつくっている。まさに別荘の気分。イビサの町へ遊びに行ったり、ただひたすら海を眺めてアラブラした。ほんとうに長年、私も中井さんも働きつづけてきたわねと私は自分に問うている。パチがあたりそうない旅だから、うんと楽しんでまた自分に言う。

イビサに三日いて、私たちはバルセロナへ。

昔、コロンプスはここから世界へ挑んだ。そんな海の彼方をさすようにコロンプスの像と模型の船が港にある。

港から町中までランブラス通りという大通りがあって、その真中に私たちの泊まった二ツ星ホテル(スペインはホテルは星印の数で、レストランはフ

オークの数で等級をあらわす)ガウディがあったせいか、三日間いたバルセロナでは、この通りが一番思い出多いものとなった。

ちょうど土、日と重なって、バルセロナはフェスタ(祭り)だった。シエスタ(昼寝)を終えた陽気な人々はこぞって街中にくり出し、古い教会前の広場では、フランスのオーケストラが指揮者のおじさんのうたに合わせ、何やらおごそかにやっている。どこからこんな人が集まってくるのだろうかと思う程の人の群れ、騎馬警察の馬がウニコを石の道にたれ流し、バルというバルは酒を飲む人であふれ、信じがたい光景がくり広げられた。

宿に帰ろうと通りを歩いていると、それとわかる「夜の女」に私は左手をつかまれ、早口のスペイン語で話しかけられた。何のことやらわからないでいると、彼女は私の手指のない左手に

キスをした。一瞬の出来事で私はことの成りゆきがわからないでいたが、暖かいものが二人の間に流れたのは確かだった。三十九年も生きてきたけど、こんなすてきなことは生まれて初めてだった。日本ではさんざんな目にあってきたから、とりわけすごい体験になってしまった。

昼のガウディに驚いたカルチャー・ショックか、さっきのキスカ、単なる疲れか、帰ってもなかなか寝つかれずぼんやりしていると突然火花やら爆竹やらが鳴り出し、どういう国民なんだとやたらおかしくなった。中井さんはすっかり寝入っていて、この次第を知らなかった。幸福といおうか不幸といおうか?

次の日曜日、ガウディも見だし、マラガの太ったおニイさんの案内で夜のバロセロナも見だし、フラメンコも見だし、今日は買物でもしよと思ひ、

荷物をまとめて外に出てみると店という店が閉まっていた。ではデパートぐらいと思つたのが甘かった。デパートはきちんと閉まって、バルだけ開いている。日曜日は休みましよう。みんなでそう言っている。で傷心の思いを抱き、ピカソ美術館へ行く。なんとタダ。傷心の心もこれで救われた思いがした。

その日私たちはグラナダへ行った。グラナダへ着くとスコールのような雨。この日は四ツ星のホテルへ。高級というのにはロクなことがなかった。食事はまずい、人はぶあいそう、一つだけよかったのは、ドイツ人のエキサイティングおじさんにジンと高級コンьяックをおごってもらったこと。このおじさんコロン(ケルンをこう発音した)の人でやたらエキサイティングと言っ

てはしゃいでいた。次の日は二ツ星のホテルに変え、アルハンブラ宮殿へ。その名の通り(赤

い城)赤っぽいというか黄土色がかつた赤の城壁が、淋しげに見える。堀田善衛の「グラナダ暮し」に、アラブの公家たちは、あけっ放しの宮殿でどうして暖をとったのだろうかと書いているが、実際に見てみるとその疑問はあたっている。シエラ・ネバダの雪解け水は宮殿の池という池を満たし、街中の広場を満たしている。水飲み場で水が飲めるなんて夢のような気がした。

その夜は魚貝類のおいしいという二本フォークのレストランでガスパチョとバエジャを食べた。マラガという名にひかれ、いwashも食べた。塩っぱかったけどいだけだ。バルセロナと違って、ここは夜も早く静かで、人も少なく、バルで人々はひっそりと酒を飲んでる。

この旅行で苦労したのはトイレで、公衆というトイレがないのだ。グラナダ最後の遅い屋をバルで食べていたら

日本人らしき人が店の人と親しく話をしていたので声をかけ、話をしてようやくわかった。バルはトイレだということが。バルは外に向かって開け放たれ、無数にある。人々が集まり話をするということだけでなく、公の場の役割もしているのだという。なるほどね。開放性とあたたかみはこういうところに根があるんだ。ヨーロッパのいなかのスペインのそのまたいなかのグラナダから私たちは再びイビサに戻り、地中海で私は泳ぎ、中井さんと志名子嬢は一日陽をあびた。

ロンドンへ出かける日は、もう二度と来ることはないだろうと思うと、ここに自分が立っていることが不思議な気がした。

病気がうまくつきあうことが外に出てわかったというだけでも、お金を使った意義があったというものだ。

ソウルの夜 鎌田慧

まだ宵の口だったが、東大門市場の屋台に坐った。ここはソウル駅ちかくの南大門とならぶ大市場で、荷台に鉄棒（建築用の節のついた異形棒綱）を背負子のように高くそびえさせたせ、荷物満載した自転車やオートバイが背中をこすって通り抜ける。雑貨や衣類や魚介類とその干物、一間巾の店にはおびただしい商品があふれている。韓国へ行ったのは工場見学のための団体旅行で、仲間は新聞記者や大学教師たちである。

市場の通路に店をだしている屋台をとりかこむと、アワビやタコやイカなどをコマ切れにした刺身が大きな皿に盛ってだされる。しその葉っぱなどにくるんで、辛子醤油につけて食べる。それと焼酎の真露（ジンロ）。

隣りの席に、若い女性のふたり連れが坐った。といっても焼酎を呑みにきた訳ではない。まわりには、勤め帰り

のサラリーマンや家族連れなども坐っていて、安あがりの夕食ということらしい。

女性のひとりが話しかけてきた。大学で日本語を勉強しているとか。まだ三十代の大学教師が話し相手になった。韓国の大学に関心をもっていったからである。真面目そうな、なかなか感じのいい学生たちである。

ホテルに帰ってから、わたしは記者と評論家の三人で、ある特派員と会った。なんとという料理か忘れてしまったが、鶏の胃袋にモチ米を詰めこんで、朝鮮人参などを浮かせているスープ状の料理を食べながら、大宇自動車や清溪被服労組の争議の話しをきいた。全斗煥が登場したあと、労働法が変えられ、労組も再編成された。それでも、さいきんになって学生出身者が指導する労働争議が目立ってきた。そのことで頭を悩ましているという話しは、労

働部（省）や経営者団体の幹部たちからもきかされていた。日本の学生も、十六、七年前までは、運動の最前線にたっていたのだが……。

ホテルに帰って、喫茶室でお茶を飲んでみると、夕方、市場で会った女子学生に声をかけられた。大学の先生と約束していたのだが、彼はどこかへ出かけてしまったので部屋にいない、という。センセイはどうも「ウォーカーヒル」にルーレットの勉強に行ってしまったようである。そこで、彼が帰ってくるまで、わたしたち三人が責任上、相手になって間をもたすことにした。約束破りの日本人の汚名を雪（そそ）がなければならぬ、とけなげに決意したのである。

片言の日本語を喋れる女性の祖母は日本にいる、という。両親も日本語ができる。彼女はちょっと地味な感じだが、もうひとりの女性は、モダンバレ

ーもやっているとかで、髪を長く垂らした美人である。地味な女性がバレエの女性に日本語を教えているとか。ふたりはルームメイトなのである。出身地をきいたとき、バレエの女性が、光州といったのだった。一瞬、わたしは自分の眼の色が変わったのを感じた。「80・5・18」と彼女が紙に書いた。筆談である。政府は「光州事態」の死者を一九一人と発表しているが、とてもそんなものではない。何人か、その数はわからない。父母たちも、STONEを投げたかかった。いまでも話すところになる、と両腕をそろえて前に突きだした。それ以上のことは、語学の壁でききだせなかった。それに大学教師がようやく姿をあらわしたのでわたしたちは義務をはたして部屋に帰った。

一時間ほどして、枕許の電話が鳴った。さっきの、日本語のできる女性の

ほうからだった。「これからそちらへ行きたい」

きままちがいではない。しかし、わたしはそれほどでもないタイプではない。十二時をすぎていた。「きょうはもう遅いから、もし、話したいんだったら明日の朝にしませんか。三人で朝食をたべよう！」

不粋な提案だが、それが最大の譲歩だった。

受話器をおいてから、急に不安に襲われた。どうして、名前を知ったのだろう。それが不思議だった。わたしは名刺を渡していなかったのである。キヨロキヨロ、部屋の隅や天井を見まわした。なにしろ、わたしは北朝鮮に行ったことのある男である。そんなコンプレックスが突然、浮上した。

思いあぐねて、さっきまで一緒だった年配の記者の部屋に電話した。「ああ、それはよくが教ええたんですよ。

いま電話があったから」

ホッとした。と、彼がきいてきた。

「それでなんていってました、彼女は」

「ええ、遊びにきたいって」

「そう。やっぱり。ぼくにもそういってましたよ」

翌朝、彼女たちは現れなかった。考えてみるまでもなく、むこうにしてみれば、一緒に朝食を食べたにしても、たいして面白いわけではない。

彼女たちが学生だったのか、それとも学生でなかったのか。学生なのだけど、アルバイトをしたかっただけなのか。そのところがよくわからない。

翌日、慶州の東急ホテルに泊まった。浦項(ポハン)製鉄や蔚山(ウルサン)の造船、自動車工場の中継地として、日本の観光客ばかりかビジネスマンの宿泊が多い。支配人が、この町の唯一の日本人とか。彼は単身赴任できたころは、韓国料理をみるとシャックリが

とまらなかつた、という。キーセンパーティーの料理も当然のことながら、韓国料理である。それで彼は一計を案じた。日本人の口に合う韓国料理をだすキーセンパーティーをホテルで幹旋することにした。これは大好評とか。近所から客をとられる、という批判もあるそうだが、そのせいかどうかホテルの経営は順調だそうである。

まあ、韓国料理がすべて日本化することはないにしても、日本的経営は権力的に実施されている。同化せず同化させる日本人の趣味の侵略性は恥ずかしい。ソウルの夜の街で、ボン引きの青年たちが「ダンナ、いいコがいますよ」と近寄ってくるのも、日本化のあらわれなのだろうか。

キリコの

コリクツ

玖保キリコ

嗜好は年令と共に変わっていく。

以前は、あれほど肉類とか油こいものが好きだった私が、ノリと塩ザケで米飯を食べるのがおいしいと思ってしまう今日この頃である。

本当に、これが同じ人間かと思うくらい味の好みとは変わるものだ。数年前の、セロリ、ピーマンが嫌いだった私が、それらを生のままでバリバリ食べている現在の自分を見たら、いった

いどう思うだろうか。

だが、食べ物に対する好みにして、人間に対する好みにして、結局は、くるくる変わってしまうものなのだからそれに対して、別にどうのこうのとは思わない。

「まあ、時は過ぎ行くなって本当だわ。ほほほー」と新しい嗜好を羨しめばいい。ただそれだけのことだ。

しかし、嗜好が変化したのではなく「実は、自分が好きであると思っていたものが、よくよく考えると、そうではなかった」という場合、それは問題である。自分の信じていたものが、覆されたのだ。大げさに言えば。

ただ、他人に裏切られた、というのはとは違って、裏切ったのは自分なのだから、傷つくこともない代わりに、悲劇のヒロインになることもできない。それは、外に発散されない、屈折したショックとなって、胸の中でくすぶる

ことになる。

私は幼い頃、自分はイチゴのショートケーキの好きな子供であると信じていた。イチゴのショートケーキを嫌いな人は、そんなに多くはないはずだ。「ケーキ」と言われて、まず思い浮かぶのは、イチゴのショートケーキだろう。これを置いていないケーキ屋さんというのは滅多にない。また、これを他のケーキと混ぜておみやげに持っていた場合、イチゴのショートケーキに手を出す割合は、私の友人知人親兄妹の中だけでも70%は占めている。つまりイチゴのショートケーキは人気があるのだ。

そんなに人気のあるものだし、ショートケーキというのは、当時としてはちよっと豪華なおやつであったから、親が子供の喜びを期待して、イチゴのショートケーキを買い求めるのも当然

のことだと思ふ。

そして、私の兄はイチゴのショートケーキを好物としていた。また、私も年長者をまねてしまふ年少者の習性と、そのイチゴの赤と生クリームの白で構成された美しいコントラストと、母親のこもし出す「今日はケーキがあるのよ」という特別な雰囲気によって、「自分もショートケーキが好きなのだ」という観念にとらわれていた。

私の母親が、ケーキ皿を目の前にして、大きく口を開けてへらへら笑って喜ぶ私たち兄妹を見て、「私の子供たちはイチゴのショートケーキが大好きなんだわ」と思い込むのも無理はない。そういうわけで、私自身は何の疑問も感じずに、「ケーキといえばショートケーキ」という幼年時代を過ごしていた。

本当にある時突然気がついたのだ。

前から、何となく変だと思ふ気持は薄々あったのだが、それはあまりにも漠然としていたので、大して気にかけてはいなかった。

私は、ある喫茶店で、一緒に行った友人たちにつられて、シュー皮と生クリームを交互に重ねたケーキを注文した。それは何故だか、私にとって非常に食べにくかった。そのケーキ自体に問題があったわけではなかった。他の人々は皆幸せそうに食べている。人付き合いの悪い方ではない私は、その時何とかがまんしてこれを食べきらなければならぬと密かに決意していた。好きな物に対して、がまんして食べないということはあっても、がまんして食べるということはあまりない。よほどの満腹時をぬかしては。

この時、気づくべきであった。しかし、私は、やはり違和感は感じたものの、はっきりと認識するまでには致ら

なかった。

次に違和感を察知したのは、あるウイン風ケーキ専門店においてであった。その店では、ケーキを注文するとき、生クリーム添えか、ソフトクリーム添えかを選択することになっていた。「どちらにしますか？」

そう聞かれて、私は困った。私はどちらも選びたくなかったのだ。

「両方抜きでお願いします」

私は、横で選択を待っているウェイトレスにそう言ったのだが、彼女は、「そんな注文のされ方、マニュアルになかったわ。困ったわ」という顔をしたので、さらにこう言った。

「生クリーム嫌いなんです」

「嫌い」とまでいうのは大げさであるが、とにかく声に出すことによって自分の気持が判明した。

走馬灯のように蘇る、プリン・アラ・モードを注文する時に感じる「生

クリームがじゃまだな」というあの感覚。その原因が明らかになった。

私は生クリームが好きではない。

あれれ？ そうすると、私の「イチゴのショートケーキが好き」という嗜好はどうなるんだ？ 矛盾するじゃないか。混乱を解明するために、幼年期初期に逆のぼって思い出してみよう。あの頃が一番、ストレートに好き嫌いが存在する。

玖保キリコの幼年期における、イチゴのショートケーキの食べ方

まず、トップを飾るイチゴをケーキから降ろす。

生クリームをスポンジ台からはがして、兄に与えてしまふ。

スポンジ台を食べる作業にとりかかりながら、スポンジとスポンジの間にサンドされたイチゴを食べる。

イチゴがスポンジの間から姿を消すと、スポンジに対する興味も失われてしまうので、それも兄に与えてしまふ。

最後にお楽しみにとっておいたトップのイチゴを食べて終わり。

あれ？ 結局、イチゴしかまともには食べてないじゃないか。私を魅了していたのは、イチゴのショートケーキという複合体ではなく、単にイチゴだけではないか。おかしーな。私はイチゴのショートケーキが好きだと思っていたのになー。

そりゃ、私は（アンを全部とってもらった最中）とか（アンを全部とってもらったまんじゅう）とかを好んで食

べる子供だった。しかし、アンは嫌いだけど、ちょっとぐらいいならついてても許せるし、むしろその方がおもしろい自分と説明することができた。

イチゴのショートケーキに関しては全く気づかなかった。その華美な外観に感わされて、本質を見つめようとはしなかったのだ。

対象が人間だったら、それなりに人生経験だと思えるが、——例えば、顔がいいだけの男に心ひかれたものの、やはり、男は顔じゃない。心よ。と気づいた場合とか——相手がケーキではアホとしか思えない。

とにかく、それを認識したのが、高校三年の時だったから、十五、六年の間、イチゴ食べたさだけで、生クリームが好きではないのに、イチゴのショートケーキが好きと信じていたのだ。私は、はっきり、そんな私をバカだと思ふ。

料理がすべて 田川律

反省したらすぐに秋が来て、少しづつ元氣も出てきた。九月三十日には、十月二日の「バゴン・ブカス・コンサート」のための練習が、悠治さんの家であった。水牛楽団と、斉藤晴彦+高橋悠治の練習。舞台監督、としては出席しなくては、と、ついでに若干の料理をした。笛の西沢さんにも手伝ってもらって、アジの南蛮を作った。

小アジをビニール袋に入れ、そこへ片栗粉、コショウ、塩少々を加え、振りまわして、粉を魚にまぶす。これは手も汚れず、粉もまんべんなく魚にまぶされる。油をたっぷり熱して、そこで焦げ目がつくぐらいにアジを揚げる。

かくなったら、酒のカスを加えて出来上り。例によって、いっぱい作りすぎて、次の日、ナンキンだけ別にゆでてたしてあたため直したら、なにやらナンキンのクリーム・スープ風になってしまった。それにしても少々生臭かったけれど。

それから、また数日たって、今度はCさんとUさんが遊びに来たので、お好み焼きを作ることになった。大阪・生野の勝山通りのあたりに「桃太郎」というおいしい店があり、ここの名物のひとつに、カキ（もちろん、貝の）とジャガイモのお好み焼、というのがあって、これを作るう、とやってみた。カキは、ざっとゆでる。ゆでるととも小さくなってしまふ。それでも昔塩カラのイカをいためた時のような麦貌はしなかった。あの時はひどかった。ターサイかなんかといいためたのだが、チリチリになって、イカラシキモノ、

その間に、ニンニクをミジン切り、玉ネギをスライス、ニンジンを手切りにし、砂糖、酢、しょう油の三杯酢をたっぷり作ったものに漬ける。揚げたアジもこの中に漬ける。約一時間後からおいしい。

十月のある日曜日。テレビで、桂三枝VS桂枝雀があった。三枝は、すきやきをしながら、すきやきの落語をやるという。ライブ落語（?）。話と料理がうまく同時進行するか、と思っただけ、不思議にうまくいった。もっとも、どんな手品を使ったのか、話が終る頃に、ずい分入れたはずの肉をはじめとする具がほとんどなくなっていたのには少々びびりした。喋っていた間中もちろん食べてはいたが、あんなにたくさん食べたはずはない。最後は、残った肉をお土産に持って帰る話になるのだが、ホンマに肉だけ残ってた。話の合間、本人がアップでうつって

がツブツブで残っただけ。

ジャガイモは、輪切りにしてゆでる。だし汁を作る。これをさまして、小麦粉（薄力粉）と、卵と、だし汁と、それに長芋をすりおろしたものを適当にまぜ、キャベツの千切り、干しエビを加え、お好み焼のベースを作る。鉄板、なければフライパン、に油をひきまず、カキ、それからジャガイモをのせ、ほどほどに焼き、その上に「ベース」をたっぷりせて、あとはふつうのお好み焼きを焼くのと同じ。

この日は、「ベース」が少々柔らかすぎで、なにやら奇妙なものになったが、味はバツグン。焼き上ったら、ソース、マヨネーズ、青のり、けずり節をかける。このどれを使い、どれを使わないかは、まさに「好み」による。ヤリイカのワインむしも作った。今はヤリイカが安い。オリーブオイルをたっぷり使い、ニンニクをミジン切り

る時に、鍋の中のをこっそりへらしてんやろか。それともライブでやってくるけど、テレビ得意の「ヤラセ」であとでうまいこと編集したんかな。

その頃「ふるさと十勝」から、新巻鮭を一本送って貰ったので、鮭のマリネを作った。玉ネギをスライスして、レモン（これがこのところ異常に高いので、めったに使わないが、さすがにマリネに、スダチを代用するわけにもいかず）をスライスして、サラダオイルをたっぷりかけた中に、鮭の切り身を加えて、小一時間したら食べられる。

ついでに、頭（鮭の）を使って、カス汁をこしらえた。正式な作り方はわからないが、ともかく頭をブツ切りにして、たっぷりの水に入れ、煮たててそこへ、里芋（これは別のところ、軽くゆでる）大根、ニンジン、コンニャク、ネギ、それと甘味を出すためにナンキンを多めに入れ、いずれもが柔

をいためたところへ、ヤリイカを入れ（これはもう、何もしないで、ドバツと入れる）塩、コショウをして、ワインをたっぷりかける。あれば、シソの葉を刻んでふりかけてオシマイ。

ついでに、手抜きでスープを作った。スープ・ストックを溶かすだけのものに、お好み焼きで残ったジャガイモとすりおろすには小さくなりすぎた長芋のハジッコを輪切りにし、キャベツの刻んだのあまりも全部具にした。

次の日は、ここへほうれん草を加えその次の日は、そこへ豆腐を一丁そのまま入れて、目先をかえて、連日食べ（飲んだ）た。

大阪からはおいしい丹波栗が来たので、また、圧力鍋でゆでるだけで、しっかり食べた。Uさんは、わさび漬をくれたので、二子玉川高島屋の「長崎まつり」でチクワを買い、穴の中にこれをためて食べた。

ローランド・ジョフェの「キリング・フィールド」は、カンボジアでのふたつの殺戮を舞台にしている。

七三年九月の米軍によるニク・ロンの誤爆事件からはじまる。「ニューヨーク・タイムス」の特派員ジャンバークは、カンボジア人の取材助手プランと警戒線を突破して町に潜入し、その悲惨を報道する。イギリス人の監督が米軍の恥部を暴露するアメリカ人のジャーナリストの情熱を描いている。ベトナム戦争をテーマにした多くの映画やチリ反革命を扱った「サンチャゴに雨が降る」や「ミッシング」など、米

軍やCIAを批判したのや、あるいは「チャイナ・シンドローム」や「シルクウッド」などの反原発映画などをみると、日本の映画監督やジャーナリストたちの仕事の不毛について、つい想いがおよんでしまう。

さて、米軍の殺戮をみたジャンバーク記者は、まもなく、ロン・ノル政権の崩壊と大使たちの脱出を目撃することになる。星条旗を降ろして大型ヘリコプターで雲を霞と逃げていくシーンは、ドキュメンタリータッチで、この映画の圧巻である。と、戦車に乗ったクメール・ルージュの兵士があらわれる。映画はここからちがった形で展開する。外人記者たちは国外に追放されカンボジア人の助手だけが残される。だから、あとは、助手がみたボル・ポト派の殺戮の描写である。

ここに登場する少年兵たちは、顔をひきつらせた殺人鬼である。奇妙な甲

高い声で叫ぶように話しているだけでその翻訳は字幕にあらわれない。インテリで、外国人のもとで働いていたプランは、身分を隠して虐殺を免れ、辛じてタイ国境の難民収容所にたどりつく。

プランはきわめて中途半端な存在である。彼はあくまで助手であり、自分で記事を書くわけではない。政府軍側ではないし、シアヌーク派でも、ボル・ポト派でもない。そのあいだで逃げまどう一般民衆のひとりでもない。かといって、雇主の記者のように脱出したにしても、アメリカは異郷でしかない。曖昧な存在のまま戦乱をくぐり抜けなければならぬのは、今日的なテーマのような気がする。たとえば、アジアにいる日本人特派員の助手たちはその地で革命がはじまったとき、どうするのだろうか、などと考えてしまうのである。

この映画の原作は「ニューヨーク・タイムス」の記者の手記によっている。虐殺の原野を逃げまわった当事者が書かず、先に脱出して「虐殺」を目撃していない記者が書いていることは、自分の国にいても助手だった彼が、自分の体験を発表するのでさえ、助手でしかなかったことを意味している。

どんな混乱があったにしても、共同的な組織は壊れない、というテーマを扱ったのは、ジョン・ヒューストンの「女と男の名譽」である。

マフィアの殺し屋であるジャック・ニコルソンは、もう五十にちかい中年なのだが、突然のように恋してしまう。相手のキャサリン・ターナーは、彼が殺した組織の裏切り者の女房であり、それもフリーの殺し屋である。それでも、二人の殺し屋同士はアツアツになり、一致協力して銀行頭取を誘拐するのだが、たまたま現場にいた警部の妻

を巻きこえにして殺してしまう。これで、マフィアと警察との蜜月時代が終わり、犯人を警察に差しださないかぎり、組織を維持できない。ジャック・ニコルソンは、組織をとるか愛をとるか、組織人固有の難題に直面する。

それまでの展開では、彼女の方がはるかに頭の冴えた殺し屋であり、プロ意識に徹し、男女の関係においてもヘゲモニーを握っている。観客は彼女の提案を受けての墜ち落ちとなるであろう、と期待するのだが、マフィアの血は、アメリカ国内帝国といえるファミリーの掟として、外部の女は切り捨てることを要求する。

ジャック・ニコルソンはマフィアの掟に忠実に生き、マフィア映画は定石通りの結末を迎える。哀れなのは、マフィアを恋した女である。

やはり、ファミリーに帰属して終わるのが、ベルイマンの「ファニーとア

レキサンデル」である。この映画はこれまでのベルイマンのように禁欲的ではなく、フェリーニかと思ってしまうほどに快楽的で、神父へのあてこすりもまたフェリーニ的である。

劇場主の妻で女優でもあるエヴァ・フレリングは、夫が脳溢血で急死したあと、にわかに神の愛による幸福を追求することに眼覚め、相談相手になつていた神父と結婚してしまう。が、姑や小姑のいる主教館での生活は、彼女がはいりこめるようなところではなかった。それに神父はカネの亡者であるばかりか、彼女の子どものファニーとアレキサンデルを虐待し、ついにたまりかねて家を出る。彼女はまた劇場一家の許に帰り、劇場の再興に賭ける。と、まあ、今月たまたまた三本の映画は、それぞれ、脱出は挫折するものであることを教え、曖昧な主体の自己変革を呼びかけていたのであった。

津野海太郎

物語がおわったあとのことが気になるたちだ。

長谷川四郎は「坊ちゃん」のつづきを芝居にしたいと思っただけらしい。かれが病気になるすぐまえに、「給金がぐんと安くなって、家賃がぐんと高くなって、まだ江戸の名残りをとどめる東京にまいもどって市電の技師になった都市プロレタリアートが、わが坊ちゃんなのである」と書いているのを読んだことがある。

なるほど。でも、ちょっと都合がよすぎるみたいでもあるな。

そう思って原作をめぐって見たら、最後のページに、「その後ある人の周

旋で街鉄の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくなっても至極満足の様子であった」としてのさされてあった。新時代の東京における都市プロレタリアートとしての坊ちゃん——かならずしも、ガンコな老革命派が、わが田に水をひただけの話ではなかったのだ。

先月は三つ芝居を見たのに、それについて書くスペースがなかった。今月はゼロ。月おくれの時評というのも気のならない。そこで——

荻窪の八幡神社境内で芝居をやるというので、散歩のついでに、のぞいてみることにした。「聴耳頭巾」というグループの「ボチャーン！」——演出はイタロ・カッシーノという人物。

せまい境内いっぱい黄金色のテントがはってある。鳥居のそばで、近所

の台湾屋台「瑞鳳」のおやじさんを見かけたので、いっしょにテントにはいる。方三間の張りだし舞台。それをかこんで七、八十人の観客たち。老人と子どもが多い。赤いフンドシをしめた大きな男がドラを叩く。シモフリのツメエリみたいな衣裳をつけて、十人ほどの男女がゴロゴロ登場してきた。

その十人ほどの男女がコンピュータ制御の楽器らしきものを鳴らしながら、一人で、数人で、ときには全員で、ふしぎなリズムをもった語り物をゆっくりと語りはじめ。なんだか呉茂一訳の「オデュッセイア」みたいだな。しかし、ホメーロスの叙事詩に「トビオリのボチャーン」とか、「ササアメのキーヨ」なんて奴がでてきたっけ。「これ、なんですか？」とおやじ。「わかりません」と私。

しかし、「ボチャーン」が「キーヨ」に見送られて、「いと迅きシンカン船」

に乗りこみ、長い放浪の旅に出る場面

に及んで、やっと私にも見当がつきはじめた。ははあ、これはあれだな。長谷川さんとはちがうけど、でも、これまた、なんらかの法則にしたがって変型させられた「坊ちゃん」の物語なのだ。ほらほら、案の定、「イッセンゴリンのヤマアラシ」が出てきたじゃないか。

芝居のあと、「瑞鳳」にいった。八幡さまの鳥居を出たすぐ右側にある小さな店である。そのL字型のカウンターの奥で、ブタの耳をサカナに、やせた中年男がコーリャン酒をあおっていた。私もカウンターの尻をおろし、注文したビールとソーセージが出てくるのを待っていると、なにかブツブツつぶやいている男の声がきこえてきた。「……失敗だ。みんなアクビしていた。ひどい失敗だ」

もしかしたら——

「あなた、イタロ・カッシーノさんじゃないですか？」

やっぱりそうだった。「失敗というのがいまの芝居のことだったら、そんなことないですよ。私は大いにたのしみました」といってやると、よろこんだかれは自分の演出意図について長々と説明しはじめた。

「坊ちゃんという主人公のその後ではなく、私は「坊ちゃん」という小説のその後に関心があったんです。遠からず本というものはなくなりません。そう私は確信しています。それは文字がなくなるからです。教育制度が崩壊し、エレクトロニクス文明が成熟していくなかで、やがて、われわれの子孫たちは読み書き能力を失うでしょう。私はそのことを悲しみません。むしろ歓迎します。そのとき「坊ちゃん」は活字文化の世界に別れをつけて、口承文化

の世界に移行します。文字のない世界で、何十年、何百年にわたって口から口へと語りつたえられているうちに、「坊ちゃん」は巨大な叙事詩的ファンタジーに変質してしまうはずで、故郷をはなれたヒーローの放浪と帰還の物語ですね。作者が熱狂的な寄席ファンだったことに注意してください。もともと「坊ちゃん」というのは口承文化と文字文化とのあわいに成立した作品だったんです。近代作家たちが口承文化から奪いとった富は、ふたたび口承文化の世界にもどしてやらなければなりません。そう考えて、私はあの芝居を演出しました。そうですか、わかっていただけでしたか」

そんなにご大層なシロモノでしたっけと思っただけ、口には出さなかった。酔っぱらいと議論するのは苦手だ。今晚のビールは、これ一本だけにしようと思いきめた。

●ウニタ・ミニマ（近藤達郎＋れいいち）
「夜の遊び時間」(TAKE・OFF
7 10月17日)

白と赤でまとめられたステージに明るい光がさしこんでいる。キカイの正確さでドラムスが時をきぎむ。かげりのないピアノの音に、抑揚なく一様にぼやけたシンセサイザーが日向の短い影のようについていて。モードルで終止点をもたないメロディーがゆっくりまわる。

丘の上の大きな木。太陽がしずむ。そしてぼくたちはここにいる。ほかにほだれがあるだろう。

この風景は現実のものにしてはあま

りに清潔で、こわれやすくて、窓の向うに遠ざかっていく。これが東京でいちばんあたらしい音楽世代の未来だろうか。

だれもいないへやで、今朝のメニューをつける声がある。電子調理器から二人分のたまごやきがすべりだし、20分後には手つかずのまま処理され、消滅する。次の朝も、そのつきも。昔よんだことのあるレイ・ブラッドベリーの小説があたたまをかすめる。

この人たちの感性は、もしかしたら核戦争のあとにのしずかな日々をいま、もう生きていくのかもしれない。それは都市の日常のように見えて、じつはまったくちがう未来の幻覚だ、というのは充分ありうることだ。

どちらにしても、たしかなことは、どんなに関心をもっていても、ぼくたちの世代は、かれらの世代に通じることばをもっていない、ということだろう

うか。

コンサートのなかに突然のように、「くらしい曲ですが」といってでてきた「セチュアンの善人」のためにアイスラーが作曲した歌「自殺について」はなんだったのだろうか。永遠にかわることのない朝にいて、冬の夜の時間、たえられない貧しさは、体験したことのないゆえに、むしろなつかしい記憶となるのだろうか。

●高橋鮎生「メモリー・シアター」
(レコード)

これも同じ世代の歌。ほとんどの曲が、ただひとつのモードのひとつのドローンの上にただよっているように聞こえる。ドラムスのきぎむロックのリズムもそのなかにとけていく。

庭のなかにたてられた、たくさんのへやをもつ家。へやのひとつひとつにゆめをかくして。グリニッチ・ヴィレ

ッジのどこかで、60年代の世界にまよいこむ。20世紀末の紅樓夢。内部に向かってひらかれた目。いま起こっていることも記憶の劇でしかないような。「いいたいことば いえないことば」とぎれとぎれに つたえていく」
だれに？

「ヴォツェック」のなかでうたわれぬ民謡調の「こもりうた」のアレンジが、このアルバム全体にアクセントをつけている。マラーやアルバン・ベルク自身が民謡を引用したときとはちがって、そこだけがへんになまなましく、まがって。

アポモルフイネも、バーダーとマインホーフも、クロックワーク・オレンジさえも予測できなかった、もうひとつの未来図。ぼくたちの世代はわるい世界を息子たちにのこしたので、かれらは記憶のなかでそれをつくりかえなければならなかった。パラレル・ワー

ルド。ことばは未知のひびきにかわりメッセージはうしなわれた。

●三宅榛名クラシックピアノリサイタル「この世は、けむり猫の夢」(新宿文化センター小ホール 10月18日)

スカルラッティ、スクリャーピン、シューベルト、三宅榛名、ドビュッシー、バッハそれぞれの小品をならべたプログラム。偶然にひろいあつめたような、共通するところも見あたらないう作曲家の音楽を組み合わせ、ひとつの内的風景を構成し、2時間近いプログラムにきき手をひきつけて放さない集中力に、まずおどろかされる。

それぞれの曲は、かなり自由にあつかわれていた。異様なほどおそいドビュッシーの「アラベスク」や、影のよいうな音で紡ぎだされたスカルラッティなど。バッハの「オルガン・トッカータとフーガ」のようにポピュラーな曲

も、独特なリズムのとりかたで、まったくちがう表情をしていた。かつてな解釈でゆがめたもの、ということとはできない。それらは別な角度から光をあてられて、これまで見えなかった内部構造が表面に浮きだしたかのようだ。また、そこを手がかりとして、プログラム全体のコンテクストに組み込まれてもいる。演奏スタイルとしては即興的に見えながら、知的な作業なのだ。作曲のしごとを他人の曲をつかった演奏としておこなう、という意味で危険なつなわたり、感じることはできても理解しにくい一瞬の展望をきりひらく。

アルテュセールの本をはじめてよんだときの感想。「マルクスからだれも気づかなかった論理構造を抽出したのにはすばらしい。だが、なぜマルクスが必要なのか」

水牛 かたより 情報

●たばたせいいち・のべあきこ・しぎわさよこ「さっちゃんのみまほうのて」(偕成社 九八〇円) 五年もかかってやっとできた手指のない女の子のはなしの絵本。絵がとってもいいの。

(志沢)

●三宅榛名「現代音楽は私」第16回 12月10日(火) 7時。渋谷ジャンジャン。ゲスト 数住岸子(ヴァイオリン) 千六百円。電話予約はジャンジャン、☎462・0641。毎回予測をゆるさないこのコンサート・シリーズ、今度は何がきけるか、当日のおたのしみ。

(高橋)

●三宅榛名+高橋悠治+ネッド・ローゼンバーグ。渋谷T.A.K.E・OFF 7月25日(月) 7時。ひとつの笛から同時に2つの音をだすニューヨークの最前衛のミュージシャンをむかえて

の即興演奏の夕。前売二千円、当日二千二百円。予約は☎476・5297、402・3015。

(高橋)

●玖保キリコさんの少女まんが「シニカル・ヒステリー・アワー」の3巻目がでた。「シニカル・ヒステリー・アワー」と「ロジカル・アレルギー・アワー」とが、だいたい半分ずつ収録されている。読むほどにキリコ(登場人物)でなく、作者の)は「永遠のことも」だと思えてくる。ふしぎふしぎ。はやく買わないと、すぐ売りきれぬぞ。白泉社刊、三六〇円。安い!(八巻)

●劇団ノイズ公演如月小春原作+構成+演出「ISLAND」12月6(金)~15日(日) ベニサン・ピット☎634・4141。7時。土日は2時と7時。前売二〇〇円、当日二五〇円中・高校生二〇〇円。制作の構屋さ

んによれば「映像と音をふんだんに使用し、出来れば、空間自体をゆっくりと、沈めたいと考えています」だって。なんのことやら、これは観てみなければわからない。会場も新しいスペースらしい。きつとまたアツとおどろくことがあるにちがいない、と思う。予約と問合せはノイズ584・5659。

(八巻)

●中央線で本を読んでいたら、四谷をすぎたあたりで、まえに人が立った。なんの気なしに見あげると、戸田れい子さんだった。葉々と赤ん坊を背おってニコニコしている。ようやく本ができたので、市ヶ谷の平凡社にあいさつにいくところだという。

本というのは、彼女の写真集「夕張炭坑節」のこと。晶文社刊。二二〇〇円。平凡社にあいさつというのは、そのうちの何点かが去年の「準太陽賞」

をうけたからだ。

他人事のようにいっているが、そもそもは、彼女の写真と文章を「水牛通信」にのせたことでつきあいができ、晶文社で本にまとめる話がすすんだのだった。その間に、彼女は結婚をして子どもを生み、酒をやめた。写真もそれについた文章もなかなかのきざとと思うので、ぜひ買ってください。売れ行きは予想以上にいい。一か月で増刷になった。

(津野)

●先月号でかんたんにつれた三田のミニFM局の柳田さんとの話を、そのままテープから起こしたものが、「話の特集」十二月号にのっている。柳田さんと粉川哲夫さんは元気にしゃべりまくっているが、津野は「ほほう」とか「ふんふん」とかいつてるだけで、ちよっとみっともない。

柳田さんの逮捕でビビるラジオ局が

かなりではないかと思っていたが、実際には、ほとんど影響はなかったらしい。

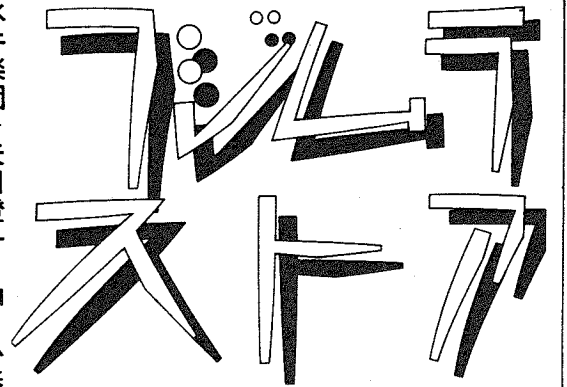
先日、「FM高円寺」局に呼ばれて話をしたが、「あれでかえってハラがすわった」とのこと。あいかわらず強気な電波を飛ばしている。荻窪の「ラジオ・コメディア杉並」局も、近所の商店街をまきこんで、十一月十日にお祭りをやるそうだ。この二局が共同で全国一〇〇ほどのラジオ局に、こんどの事件についてのアンケートを発送した。結果がわかったら、水牛通信にものせるつもりでいる。

(津野)

編集後記

編集後記を書いているからといって、その人間がとくべつ「編集」なるものをしてるわけではない、ということが、今月の「工房訪問」でわかっていただけたと思う。ただ、ワープロが置いてあって、じっさいに水牛通信をつくっているという意味で、ココ（わたしも家族の一員である家）は工房の機能もある。その作業の最後の仕上げにこの後記を書く、というよりは、打つ。これで今月号もできた！と確認するために。

ワープロはあるが、それを使った通信用のネットワークはないから、原稿やフロッピーディスクの受け渡しのためには、何人かと会う。写植のころより時間的な制約がないので会ったついでに、いろいろなことをしゃべりあう。今月、田川さんは原稿といっしょに丹波栗のゆでたのをくれた。津野さんからは、いま安い鯛の料理方法を四種類くらい聞いた。それで、わたしはこのひとりぐらしの男たちの日常というようなものを想像してみたりするのだ。なかなか興味ぶかい。（八巻）



水牛楽団+矢川澄子+如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜遣いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシヤワ労働歌
花巻農学校精神歌 ポクハソ
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。
口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。
*本誌は次の書店にあります。
横栗舎(新宿) ☎三五二一三五七
ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八七
信愛書店(西荻窪) ☎三三三三四九六一
ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二
アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

水牛通信 第七巻第十一号 一九八五年十一月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎二五五
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 ㈱トライ
プリントショップ